

博物館建築における建築家の言説にみる連鎖する空間の密度

奥山研究室 09_25672 吉池 葉子 (YOSHIIKE, Yoko)

1. 序 複数の室が順路によって明確に位置付けられる博物館建築の設計論においては、一連の空間体験を描写したシーケンスに関する記述がみられる。そのような言説にはひとつの展示室で周りのものを見回すような体験や、ロビーで遠くの風景を眺めるような体験などの特徴的な描写がみられる。このような描写が一連のシーケンス¹⁾の記述の中で分布することから、建築家の考える連鎖する空間における体験的なイメージの密度²⁾の差を捉えることができる。そこで本研究では、博物館建築の設計論を資料として、体験に関する描写の内容とその連鎖の形式を検討することで、建築家の記述するシーケンスの特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 視点空間と情景 資料とした言説³⁾において、描写された一連のシーケンスに関する記述からは、分析例(図1)のように、場所毎にどのようなものが見えるか、といった視覚的な体験に関する内容を抽出することができる。その際、視点のある空間を視点空間、描写された視覚的な対象のまとまりを情景と定義し、検討した。

2-1. 視点空間の分類 まず視点空間については道などの外部、ホールなどのエントランス部、ギャラリーなどを中心とした展示室に分類した(図2)。また各資料でシーケンスが記述される範囲を検討したところ、外部から展示室まで広い範囲で記述されるものは104資料中36資料であった。

2-2. 情景の分類 次に情景については、その内容を検討し、視点空間内の要素のみを含む⁴⁾ものを近景、視点空間外の空間や要素を含み遠方の要素を含まないものを中景、遠方の要素を含むものを遠景として分類した(図3)。中景や遠景は視点空間の外に視界を拡げる性格をもち、その中には視点空間内にある展示品と遠方にある山のように異なる距離にある要素同士が組合わさり、階層性が示されることもある。

2-3. 情景からみた視点空間の滞留性と拡張性 前節までに検討した情景から、視点空間の性格を位置づけた。ここでは1つの視点空間に複数の情景がある描写を、周囲を見回して留まるような性格(以下、滞留性)、中景または遠景をもつ描写を、視点空間の外部が見え拡がりのある性格(以下、拡張性)と捉え、視点空間毎に検討した(図4)。その結果、滞留性をもつ視点空間は拡張性をあわせもつもの(A)が多く(36/46)、さらに遠景をもつものが多かった(25/36)。また、滞留性をもつ視点空間(A、B)はエントランス部に多くみられ(23/46)、拡張性のみをもつ視点空間(C)はどの視点空間の種類でも同程度みられた。

3. 滞留性と拡張性からみた連鎖する空間の密度 前章で捉えた情景の組合せに視点空間の滞留性と拡張性を考慮して資料毎のシーケンスの描写をモデル化した(以下、情景モデル)。これらを、滞留性をもつ視点空間(AとB)と拡張性のみをもつ視点空間(C)の有無から、【単純型】、

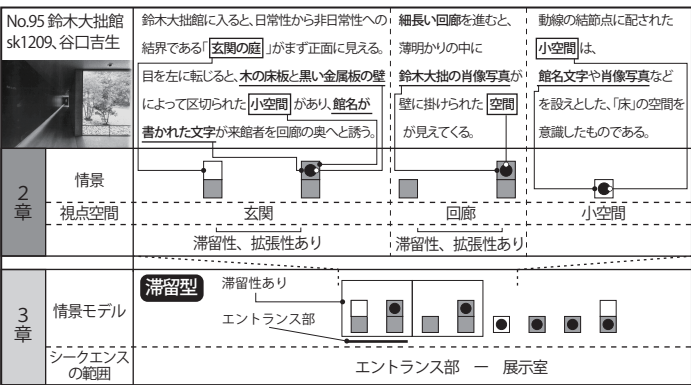


図1 分析例

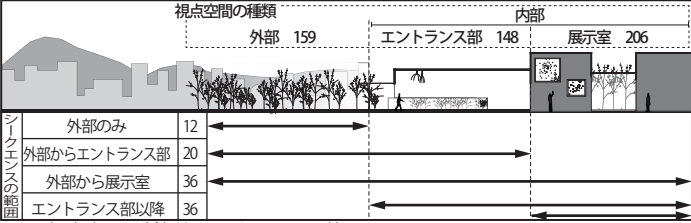


図2 視点空間の種類とシーケンスの範囲

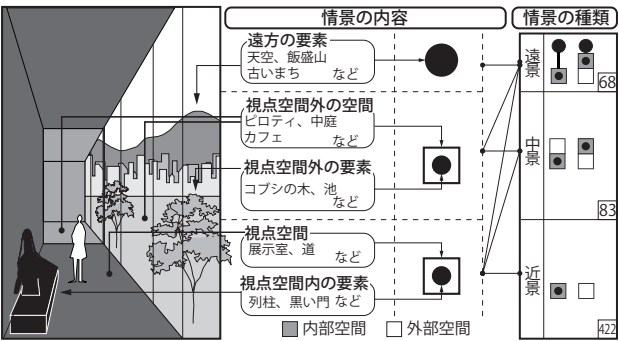


図3 情景の構成要素と種類

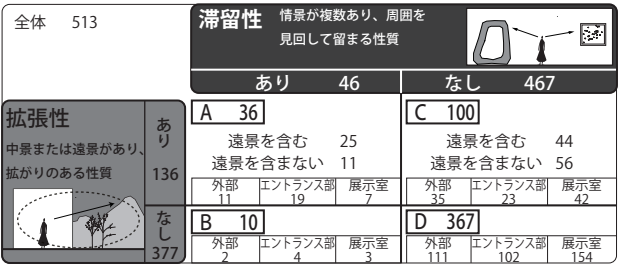


図4 視点空間における滞留性と拡張性

【滞留型】、【拡張型】、【混合型】の4つの型に分類した(図5)。これらを数的に検討した結果、Dのみで構成された【単純型】においては視点空間単位ではDが多い(図4)ことを考慮すると、作品単位における資料数は比較的少ないといえる(25/104)。ここから、建築家は滞留性や拡張性によってシークエンスに変化をつけて記述するということが多いことがわかる。これを踏まえ情景モデルとシークエンスの範囲との関係を検討した。その結果【単純型】はエントランス部以降の範囲のものが多く(図4)ことがわかった。これは、建築家が密度の変化を描写しないときには建築空間のみを記述することを示している。また【滞留型】と【拡張型】はどのシークエンスの範囲でも同程度みられた。このことは、滞留性や拡張性というのはシークエンスの範囲によらない基本的な空間の密度の描写である、と考えられる。それに対し【混合型】は外部から展示室までのものが多く(10/22)、広い範囲のシークエンスの記述をする際には滞留性と拡張性という異なる性質により多様な密度の変化をつくり出すといえる。特にエントランス部に滞留性を持ち、エントランス部以外で拡張性をもつものが多かった(7/10)。このことから、建築家はエントランス部を滞留性

によって前後と対比させて描写し、さらに外部か展示室においては拡張性により一連のシークエンスにリズムをつけることがわかった。

4. 結 以上、博物館建築の設計論におけるシークエンスについての記述から、視覚的な体験についての描写をモデル化し、連鎖する空間における描写の分布の仕方を滞留性や拡張性から検討することで、一連のシークエンスを4つの型に位置づけた。ここから、長い範囲で連鎖する空間を記述するときには滞留性と拡張性双方によって密度をつくり出し、建築空間の始まりであるエントランス部を、滞留するための空間として描写し、その前後のいずれかに視界の抜けのある体験をもつ空間を描写するという特徴的な建築家の思考を見出した。

註

- 1) シークエンスとは「視点の移動に伴い連続的に変化する景観(建築大辞典第2版、彰国社、1993.6)」のことを指し、本論でも同義で使用する。
- 2) 本研究における密度とは言説に記述される場所毎の情景描写の数と内容の偏りのことを指す。
- 3) 本研究の資料対象は、現代日本の建築誌のなかで代表的なもののひとつである「新建築」誌に1946年以降発表された博物館建築の作品解説文における、建築空間を体験的に説明する言説を扱う。104資料中48資料が90年代の作品であることから、体験的に建築を捉えようとするような思考は90年代に多いことがわかる。
- 4) 視点空間はどの情景にも含まれる。
- 5) ここでは、滞留性を示す表現が、拡張性を示す表現より空間の密度に関わると考える。

